

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

日本語学習者と日本人との繋がりを目指して：
外国人との交流に関するアンケート調査から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 関西外国語大学留学生別科 公開日: 2025-04-11 キーワード (Ja): 日本語学習者, 外国人, 日本人, 交流, きっかけ キーワード (En): 作成者: 田嶋, 香織, 服部, 真子 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学, 関西外国語大学非常勤
URL	https://kansaigaidai.repo.nii.ac.jp/records/2000346

日本語学習者と日本人との繋がりを目指して ー外国人との交流に関するアンケート調査からー

田嶋 香織

服部 真子

要旨

日本に来日する外国人の数は年々増加し、観光や留学に加え人材不足を補う働き手としての受け入れも進んでいる。現在、日本在住の外国人は 340 万人を超え過去最多となり、日本語母語話者と日本語を母語としない人々との接触機会が増えている。本研究では、日本人を対象に日本在住の外国人との接触に関してのアンケート調査を行った。調査結果から、日本人が外国人との交流に対して基本的には好意的な姿勢を持ちながらも、語学力への不安や交流方法が分からないことが障壁となっていることが明らかになった。しかし、きっかけさえあれば積極的に関わり、長期的な関係を築く可能性が示唆された。今後交流の機会が提供されれば、意見交換等を通じてより多くの日本人と外国人の関係強化が期待されるのではないだろうか。本稿では、第 11 回言語文化教育研究学会研究集会でのディスカッション内容を含み、今後の日本語学習者と日本人との交流の展望を考察する。

【キーワード】日本語学習者、外国人、日本人、交流、きっかけ

1. はじめに

日本に来日する外国人の数は年々増加している。観光目的での来日はもちろん、留学生として、また最近では日本の少子化に伴う人材不足を補う働き手として日本政府も積極的に外国人を受け入れるという方針に舵を切り、その数も飛躍的に伸びている。令和 5 年には日本在留の外国人が 340 万人を超え(出入国在留管理庁 2024)、過去最多になったというニュースも流れた。日常生活でも日本語では

ない言語で会話をする人たちとすれ違う、発音やアクセントに特徴のある日本語を話す店員とやりとりをする等、日本語を母語としない人と接する機会も増えてきたのではないだろうか。こういった接触機会が増えていく中、日本人は日本語では完全に意思疎通が可能かわからない相手と積極的に関わろうとしているのであろうか。又、外国人の側から見てみると、今日の生活で欠かせない携帯電話、手軽にアクセスできるインターネット、これらがあるおかげで日本語能力に自信のない外国からの来訪者も自分の母語で必要な情報を得、日本で行動することが容易にできるようになった。つまり日本語を習得していなくても不都合を感じるものが減りつつあると言える。日常生活の中で必要な情報を得るために日本人との接触が必要になる場面が減りつつある現在、外国人側から日本人に積極的に関わる機会を求めているのであろうか。

執筆者が教鞭を執る関西外国語大学留学生別科では、日常会話で使われる日本語の使用にも制限がある初中級の留学生と日本人の交流では、クラブやサークルに所属する学生やホストファミリーを教室に招いて既習語彙・表現を用いた質疑応答を行う会話セッションを設けることがある。日常会話の運用に困難を感じなくなる中級後期から上級の留学生との交流では、日本人学生を招いてのディスカッション、学期を通して地域の日本人との交流やプロジェクト等を行っている。留学生、日本人ゲスト双方から新しい発見があり有意義な時間であったという好意的な感想が聞かれる反面、交流の場に参加してくれる日本人学生を集めるのが困難だという声も聞かれる。

多文化共生が広く認知されつつある現在、日本人と外国人では実際にどのような交流が行われているのだろうか。日本語教師として教育の場で行えることは何であらうか。また、そもそも双方はお互いとの交流を望んでいるのであろうか。日本語学習者側から見た日本人との交流に関する調査は比較的多くなされているが、日本人を対象とした調査はそれに比べると少ないようである。本研究は日本人を対象に日本在住の外国人との接触に関してのアンケート調査を行い、日常における外国人との接触機会の現状や意見についての結果をまとめたものである。

本稿では、日本人が接する機会のある外国人には、日本語を学んでいる日本語学習者だけでなく、日本語を学んでいない人も含める。また、移住者のみならず、

観光で短期来日した外国人を指すこともある。これらの人たちをまとめて、以後「外国人」と呼ぶこととする。なお、留学生など特定のグループを指す場合は、個別の名称を使用するものとする。また本稿では、日本語母語話者を「日本人」と呼ぶこととする。

2. 先行研究

先に述べたように、携帯電話の普及やインターネット等技術の発達により、情報を得る手段は増え、人に尋ねざるを得ないという状況は減りつつある。来日して日本語を学んでいる留学生に行った調査によると、留学生が日本語を使用する機会があるのは、「場所を尋ねる」、「予約を取る」等の実務的なやり取りではなく、雑談の際が一番多いという興味深い結果が出ている（高屋敷 2022）。雑談とは、必要な情報のやりとりではないが人間関係を構築するため、又構築した良好な関係を保つためのやりとりである。同調査でどのような場面で日本語を使用したいかと質問した結果でも「レストランで注文する」「ホテルの予約をする」など特定場面での談話ではなく、日常生活一般で日本人と日本語を話したい、つまり、日本人との「雑談」を望む留学生が 65%いたことが報告されている。必要な情報を得る、伝達する場での会話と違い、雑談は脈絡もないまま突然見知らぬ相手と始めることは難しい。実際日本に住む在留外国人が望む質や頻度の日本人との交流が持てているのであろうか。

梶原（2020）によると、2020 年に行われたアンケート調査では、大学入学前にも外国人や外国人留学生と接する機会があり、概ね外国人留学生に良いイメージを抱いていたものの、その関係を大学入学後も継続している人はあまりおらず、入学後積極的に外国人留学生との接触を図る活動を行っている人も多くはなかった。知り合うきっかけがあればその機会を活かしたいが、自ら留学生のコミュニティに入っていくのはハードルが高いようである。又、実際に留学生と接した後では、留学生との交流は想像より難しいものではなく楽しいものだったと好意的な感想を持つ日本人学生が多かったにも関わらず、そこから次に繋がる交流が持てていない現状も窺えた。

大半の日本人と外見的特徴が似ているアジア圏出身の外国人は、外見的類似から「外国人」と認識されにくいからか、または、在日する外国人に占めるアジア

圏出身者の割合が多く（1 位中国（821,838 人）、2 位ベトナム（565,026 人）、3 位韓国（410,156 人）、4 位フィリピン（322,046 人））（出入国在留管理庁 HP 2024）、来日後も同出身国の人達でコミュニティを作る傾向があるからか、日本人と接触する機会が日常生活でほばないアジア圏出身の外国人も珍しくないようである。「日本に憧れて来日したものの、実は日本人の友達がいらない中国人留学生は少なくない」という実情を掲載した記事（DIAMOND online 2022）によると、唯一の日本人との接触がコンビニでの買い物の際に店員から聞かれるレジ袋が要るかどうかに対する返答の「大丈夫です」のみという留学生もいるようだ。

本研究は、上記の先行研究の結果を踏まえ、アンケートの対象を学生だけではなく社会人にも広げ、どれくらいの頻度で外国人と交流をしているか、どの様に交流の機会を設けているか、これまでの交流の経験、また今後の日本人側からの外国人との交流への希望等についての意見を尋ねた結果に加え、それに関連したディスカッション内容の結果を含めたものである。

3. 調査について

3.1 調査の目的

本調査では、日本人が外国人との交流に対してどのように思っているかを明らかにするために、アンケート調査を行った。このアンケート調査は、18 歳以上の日本人を対象に、学生だけでなく社会人にも広げて調査を行った。その後、2023 年 12 月 2 日に山梨県甲府市で行われた第 11 回言語文化教育研究学会研究集会で約 26 名の参加者にアンケート結果を伝え、日本人が外国人との交流について、参加者たちが勤める日本語教育機関等での現状や調査結果に関するディスカッションを行った。本稿では、研修集会での発表後、更に分析をしたアンケート調査結果に加え、研究集会でのディスカッション内容を考察し、日本における大学等の日本語学習機関で学ぶ日本語学習者と日本人との交流の今後の展望を考察する。

3.2 アンケート方法と内容

本調査では、Google Forms を使用してアンケートに回答してもらった。アンケート内容は、大きく 9 つの問いである。1) 回答者について、2) 年代、3) 在住

県、4) 外国人と日常的に交流を持っているか。持っていれば、どのような交流をしているか。5) 外国人と今より交流を持ちたいか。6) 町で困っている外国人を見たけた時、自分から話しかけられるか。7) 今まで外国の人と接した時に大変だった経験について。8) どんなきっかけがあれば、さらに交流ができると思うか。9) その他（自由記述）とした。

4. 調査結果

4.1 回答者の職業・年齢・在住県について

本アンケート調査には、68 名が参加した。1 つ目は回答者の職業を尋ねるため、次の質問をした。「あなたは、どれにあてはまりますか」という問いで、選択肢は、「学生」、「会社員・自営業・パート・フリーター」、「無職」、「その他」であった。結果は、次の表 1 の通りである。「その他」には、教員 3 名、フリーランスの日本語教師 1 名、大学職員 1 名、日本語教師 1 名がいた。専業主婦と記入した人は、無職に含めた。

表 1

選択肢	人数	%
学生	22	32.4
会社員・自営業・パート・フリーター	35	51.5
無職	5	7.4
その他	6	8.8
合計	68	100

2 つ目の質問は、回答者の年齢についてである。「年齢はどこに当てはまりますか」という問いで、年代を選択肢から選んでもらった結果である。「10 代から 20 代」は 22 名 (32.4%)、「30 代」は 3 名 (4.4%)、「40 代」は 23 名 (33.8%)、「50 代」は 18 名 (26.5%)、「60 代」は 2 名 (2.9%) という結果になった。「70 代」、「80 代」、「それ以上」の選択肢もあったが今回の回答者には当てはまらなかった。また、3 つ目の質問は、回答者の在住県についてである。「何県に住んでいますか」という問いについては、次のような結果になった。大阪府 22 名、愛知県 19 名、兵庫県 7 名、山梨県 6 名、東京都 4 名、京都府 2 名、北海道・神

奈川県・埼玉県・岐阜県・三重県・奈良県・和歌山県・岡山県から 1 名ずつであった。

4.2 外国人との日常的な交流について

4 つ目の質問で、「外国の人と日常的に交流を持っていますか」という交流頻度を問う質問をした。回答結果は、図 1 に示す。アンケートの回答者の多くが、外国人が身近にいる環境に身を置く人だったということもあり、一番多かった回答が「ほぼ毎日」で 20 名である。次に多かったのが「全くない」という回答で 16 名という結果になった。「その他」の 1 名は、「オンライン会話でほぼ毎日話している」と回答があったため、これ以降は「ほぼ毎日」に入れて分析を行う。その他、多い順に「1 週間に 1 回」が 11 名、「年に数回」が 8 名、「1 週間に 2、3 回」と「1 ヶ月に 1 回」がそれぞれ 6 名であった。

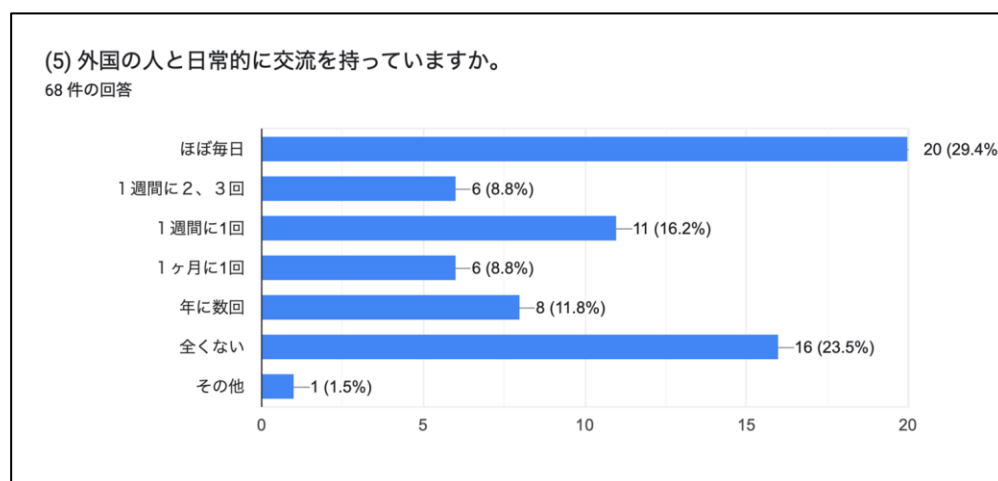


図 1 「外国人と日常的に交流を持っているか。」

更に、交流内容を問うために「交流している人にお聞きします。どこで、どのような交流をしていますか」と尋ねた。ここからは、前述の交流頻度と交流内容を掛け合わせ、頻度と内容の関係も併せて見ていく。「ほぼ毎日」交流を行っている回答した人の実際にアンケートに記入された具体的な内容は、表 2 の通りである。

表 2 「ほぼ毎日」 交流を行っている人たちの交流内容

会社で 4 カ国の外国人が技能実習生、社員、パートとして働いているので。
職場を利用している方と話します。日本語で。
日本語教師・日本語教育相談員としての仕事
現在は寮に住んでおり、 Resident assistant をやっているので毎日留学生と交流している。
大学の授業で留学生や外国人教授と意見を交換する。
教師、学校（回答 2）
授業
自宅
職場（大学）
日本語教育に携わっているため、日々留学生と日本語を通じた交流をおこなっています。
仕事柄、毎日留学生と交流しております。
海外の大学で、授業内だけでなく、放課後もよく話しています。
オンライン上で。
仕事で。客先や、同僚と。
職場で同僚として
コンビニ、飲食店など
仕事の一環で日本に来ている留学生の対応をしています
仕事上、対外国人のお客様の対応等
職場で仕事の話やプライベートの話をしている。
仕事

これらの回答をどこで交流するか、場所でまとめることにした。すべての回答を「仕事」、「学校」、「住んでいる環境」、「日常生活」、「習い事」の 5 つに分類することにした。「ほぼ毎日」外国人と交流している人は、「仕事」が 13 名、「学校」が 4 名、「住んでいる環境」が 2 名、「日常生活」が 1 名、「習い事」が 1 名という結果になった。「住んでいる環境」という中には、「寮に留学生が住んでいる」、「自宅で」という人もいたので、詳しくは分からないが、家族の中に外国人がいるということも考えられる。その他、コンビニや飲食店など

の「日常生活」で会うや英会話などの「習い事」で会うという回答があった。

次に「週に 2、3 回」と回答した 6 名の回答内容については、表 3 に示す。「週に 2、3 回」と回答した人の内容を場所で見ると、「仕事」が 5 名、「学校」が 1 名であった。

表 3 「週 2、3 回」交流を行っている人たちの交流内容

アルバイト先、大学
職場、語学教室
授業で外国人留学生と接しています
職場で。挨拶程度。
外国人従業員との会話
職場である幼稚園に来られる保護者の外国人の方

また、「1 週間に 1 回」と回答した 11 名の回答内容については、表 4 に示す。

「1 週間に 1 回」と回答した人の内容を場所で見ると、「仕事」が 8 名、「学校」が 2 名、「住んでいる環境」が 1 名であった。

表 4 「1 週間に 1 回」交流を行っている人たちの交流内容

子供の習い事でママとしてのお付き合い
オンラインで日本語会話
日本語のチューターボランティアで週に一回 1 時間 zoom で授業
アルバイトで観光客の接客
仕事など
職場で、10 代の男女
バイト先で外国人の接客をしている。
職場で雑談や仕事の話
街中 大学
大学
職場

表 2、3、4 から頻度に関係なく外国人と交流する場としては、職場や学校など毎日通う所であることが多いようだ。

更に、外国人との交流が「1ヶ月に1回」と回答した6名の回答内容については、表5に示す。「1ヶ月に1回」という人の中には、ゲームの中で会う、また一緒にご飯を食べる時などの回答があった。「1ヶ月に1回」と回答した人の内容を場所でまとめると、「仕事」が1名、「学校」が2名「住んでいる環境」が1名、「日常生活」が2名であった。

表5「1ヶ月に1回」交流を行っている人たちの交流内容

WhatsApp を使ってメッセージのやり取り
Instagram のストーリーに返信、エッセイや英語で疑問に思った事を質問
一緒にお昼ご飯を食べる
学校、サークル活動
バイト先
原神のマルチプレイ

最後に、「年に数回」と回答した8名の回答内容については、表6に示す。「年に数回」という人は、親族に外国人がいる、日本語のボランティアに参加した時に会う等の回答があった。「年に数回」と回答した人の内容を場所でまとめると、「仕事」が5名、「住んでいる環境」が2名、「習い事」が1名であった。

表6「年に数回」交流を行っている人たちの交流内容

親族の集まり
子どもが通う英会話の教室で、年に数回外国の先生がいらっしゃるときに少し話します。
親戚にいる外国人と家で会う、道端で道を聞かれる
日本語ボランティア
仕事上のやり取り
大学でボランティア、友達という時に偶然会う
取引先のエジプト人。仕事の交流
職場にて仕事で関わります。

本調査に参加した全68名の回答者中、外国人と交流があると回答した52人の交流頻度と交流場所をまとめると表7のようになる。

表 7 交流頻度と交流場所

交流場所	交流頻度					合計
	毎日	1週間に 2、3回	1週間に 1回	1ヶ月に 1回	年に 数回	
仕事	13	5	8	1	5	32
学校	4	1	2	2	0	9
住んでいる環境	2	0	1	1	2	6
日常生活	1	0	0	2	0	3
習い事	1	0	0	0	1	2
合計	21	6	11	6	8	52

交流頻度と交流場所からわかることは、「仕事」や「学校」など、毎日行く場所で外国人と交流する機会が多いということである。つまり、日本人自ら求めて外国人との交流をするのではなく、日常生活の中に外国人と接触する機会があり、自然に交流を持っているということのようである。

4.3 外国人との交流希望について

回答者が、外国人と交流を持ちたいと思っているか探るため、「外国人と今より交流を持ちたいですか」という質問をした。「今より持ちたい」、「今のままでいい」、「今より減らしたい」、「特に考えたことがない」、「その他」の

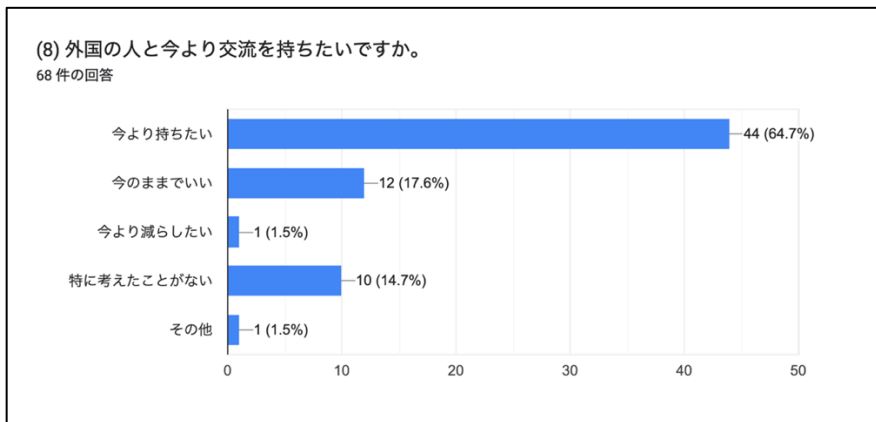


図 2 「外国人と今より交流を持ちたいか」

選択肢から選んでもらった。この回答は、図 2 のようになった。

次に、現在の交流頻度と今後の希望交流の関係を探るため、現在の交流頻度と今後の交流希望の関係を表 8 に示した。「今より持ちたい」と思っている人が、外国人との交流を「ほぼ毎日」と回答した 21 名中 10 名の半数近く、「週に 2、3 回」と回答した 6 名中 3 名、「週に 1 回」と回答した人の 11 名中 10 名、「1 ヶ月に 1 回」の 6 名中 5 名、「年に数回」と回答した 8 名中 6 名、交流が「全くない」と回答した 16 名中 10 名いることがわかった。かなり多くの人が、今より外国人と交流を持ちたいと思っていることが明らかになった。また、交流が「全くない」と回答した人の中で、「特に考えたことがない」と回答した人が 16 名中 6 名いた。普段の生活の中で、外国人と交流をする機会がなければ、外国人と交流をするという発想がなかったということが窺える。逆に交流する機会さえあれば、交流に対し好意的に捉えるきっかけとなるのではないだろうか。

表 8 現在の交流頻度と今後の希望交流

	現在の交流頻度						合計
今後の交流希望	ほぼ毎日	1 週間に 2、3 回	1 週間に 1 回	1 ヶ月に 1 回	年に数回	全くない	
今より持ちたい	10	3	10	5	6	10	44
今のままでいい	7	3	1	0	1	0	12
今より減らしたい	1	0	0	0	0	0	1
特に考えたことがない	2	0	0	1	1	6	10
その他	1	0	0	0	0	0	1
合計	21	6	11	6	8	16	68

表 8 の結果から、今よりもさらに交流を持ちたいと思っている人が多いことが明らかになったが、実際に外国人を目の前にした時に話しかけるかという視点で、「町で困っている外国人を見かけた時に、自分から話しかけられますか」という質問をした。この質問には、「自分から話しかけられる」、「自分から話しかけられない」、「わからない」の選択肢から回答してもらった。その回答結果は、68 名中 36 名で全体の 52.9%の半数以上の人々が「自分から話しかけられる」と回答した。また、68 名中 20 名で 29.4%の人が「自分から話しかけられない」と回答した。また、68 名中 13 名の 19.1%が「わからない」と回答した。自分か

ら話しかられるか話しかけられないかは、日頃の外国人との交流頻度や今後の交流頻度の希望とどのような関係があるかを示したものが表 9 である。

表 9 現在の交流頻度と今後の交流希望と町での話しかけの関係

現在の 交流 頻度	自分から 話しかけられるか	今後の交流希望					合 計
		今より 持ちたい	今のまま でいい	今より 減らしたい	考えたこと がない	その他	
ほぼ 毎日	話しかけられる	9	6	1	2	1	19
	話しかけられない	0	1	0	0	0	1
	わからない	1	0	0	0	0	1
週に 2,3 回	話しかけられる	0	2	0	0	0	2
	話しかけられない	0	1	0	0	0	1
	わからない	3	0	0	0	0	3
週に 1 回	話しかけられる	5	1	0	0	0	6
	話しかけられない	3	0	0	0	0	3
	わからない	2	0	0	0	0	2
1 ヶ 月に 1 回	話しかけられる	3	0	0	0	0	3
	話しかけられない	1	0	0	0	0	1
	わからない	1	0	0	1	0	2
年に 数回	話しかけられる	2	1	0	0	0	3
	話しかけられない	2	0	0	1	0	3
	わからない	2	0	0	0	0	2
全く ない	話しかけられる	2	0	0	1	0	3
	話しかけられない	5	0	0	5	0	10
	わからない	3	0	0	0	0	3
		44	12	1	10	1	68

この結果から、外国人と交流を「ほぼ毎日」している 21 名中 19 名とほとんどの人が町で困っている外国人を見かけた時に、「自分から話しかけられる」と回答したことがわかる。しかしながら、交流頻度が下がるにつれて、「自分から話しかけられない」や「わからない」という回答の割合が増えており、交流が「全くない」と回答した 16 名中 10 名が、町で困っている外国人を見かけた時に、

「自分から話しかけられない」と回答したという結果となった。交流が「全くない」人の中で「自分から話しかけられる」と回答した人は、16名中3名のみであった。

このことから、日頃から外国人と交流を持っている人は外国人に話しかけやすいが、外国人と交流がない人には、外国人に話しかけることに躊躇する気持ちが多いことが窺える。また、外国人との交流を「今よりも持ちたい」と思っている人でも、町で困っている外国人を見かけた時に、「自分から話しかけられない」、または「わからない」と回答している人も少なからず存在するようである。この結果から、もっと交流したいという気持ちがあっても町の中で外国人に話しかけられるという行動に即繋がるわけではないことが窺える。

4.4 外国人との大変だった経験について

本調査では、回答者が今まで外国人と接した時に、どのような経験をしたか探るため、「今まで外国人と接した時に大変だった経験があれば、書いてください」と問い、自由に記入してもらった。記入してもらった経験を分析した結果、日本人が外国人と接する際の経験には、意思疎通に関する課題を述べたものが多かった。この経験した意思疎通の困難は、大きく分けて4つである。1つ目は言葉の壁によって起こる困難である。日本人と外国人が話す外国語の間に共通言語がない状況で、単語やジェスチャーを用いても意図が伝わらず、意思疎通が困難になった状況が多く報告された。例として、英語を用いた道案内がうまくできず、目的地まで同行したなど、簡単な説明すらままならなかった経験が挙げられていた。また、英語力や発音の問題が挙げられており、日本人の英語力に限界があった場合や外国人特有のアクセントに対応できなかった場合に、自分の意思が伝えられない、または相手の言葉を聞き取れなかったという苦勞が多く見られた。

2つ目は、文化や価値観の違いで起こった困難である。外国人の文化的背景を十分に理解しないことで、適切な対応ができなかったという声があった。特に教育現場や職場で、外国人の文化や背景を考慮した支援や進路指導が不足していると感じるケースが見受けられた。これから更に多くの国から来日する外国人が増えるであろうことを考えると、現場の負担が増えると予想されるため、今後、適切な対応が求められていくであろう。また反対に、日本人が外国人に対して日本

のルールや習慣を守ってほしいという願いがある一方で、宗教や文化的な違いから生じるすれ違いや誤解が見られたことも報告された。

3つ目は、職場や公共の場でのコミュニケーションの困難である。アルバイトや職場で、外国人客や同僚とのコミュニケーションがうまくいかず、業務に支障をきたした事例が挙げられた。特にイレギュラーな状況では、簡単なやり取りであっても混乱が生じることがあったようである。

最後の4つ目は、感情に関する困難である。自分の伝えたい思いが言葉で伝えられないことによる喪失感や、外国人から理解されなかったことへの挫折感が述べられていた。また、明確に断れなかったことや曖昧な態度を取ったことで後悔や自己嫌悪を感じた経験も記入されていた。

4.5 さらに交流のために

では、外国人と日本人がさらに交流するためには、どのようなきっかけが必要だろうか。それを探るため、「どんなきっかけがあれば、さらに交流ができると思いますか」という質問を投げかけてみた。この質問に対しては、選択肢から選んでもらい、複数回答可とした。選択肢は、「職場・学校に外国の人が来る」、「公共のイベントに外国の人が参加している」「インターネット上での外国の人との交流」、「友達の知り合いが外国の人」、「日本語ボランティア教室」、「その他」である。その回答を選択した理由も自由記述で記入してもらった。まずは、選択肢の回答結果は、図3のとおりである。

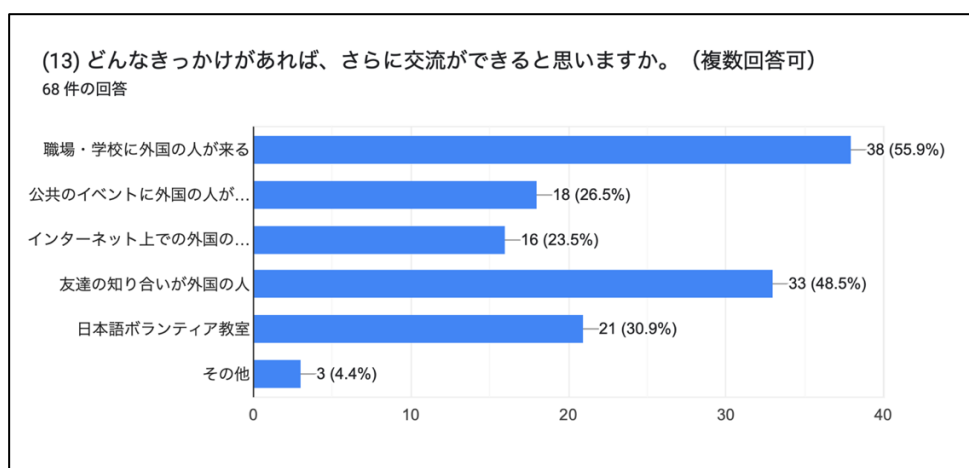


図3 どんなきっかけがあれば、さらに交流ができると思うか。

このきっかけを問う質問では、複数回答を認めたため、回答した理由が他の選択肢の理由と重なっている場合もある。回答頻度の高かった内容をここでは挙げる。

「職場や学校に外国人が来る」とさらに交流が増えると答えた人は、「必要性に迫られるから」、「交流の機会が増えるから」、「自分が定期的に行ける自信がないが、外国の人に来てもらえれば日常生活の中に外国の方がいて交流があったら、いろいろな話ができる気がする」等があった。「公共のイベントに外国の人が参加している」のであれば交流ができると回答した人は、「公共のイベントなら安心感があるから」、「各市町村など家の近くでイベントを開催してもらえれば、家から近くて参加しやすい」、「お互いに声をかけやすい」等の意見があった。「インターネット上での外国人との交流」と回答した人は、「自分にとって SNS が身近であり普段学校で過ごすことが多いからインターネットが交流するのが便利である」、「身近に接する機会があれば交流すると思う」、「直接会うのはハードルが高いから、Web 英会話教室のように交流ができたらいと思う」といった意見に加え、「インターネットなら場所も気にせず気楽に交流ができる」という意見もあった。「友達の知り合いが外国人」だったら交流できると回答した人は、「自分から外国人のコミュニティに参加するのはハードルが高い」、「友達を通してなら話しやすい」、「実際の友達の知り合いの留学生と友達になったことがある」、「友達などがいれば日本人のサポートがあって言語がわからないという心配をしないで、安心して交流できる」という意見などがあった。「日本語のボランティア教室」と回答した人は、「お互いに目的を持って参加しているので交流しやすい」、「友達を作るタイプではないので半強制的に関わる機会があったほうがいい」、「日本語ボランティアは日本語を教える場ではなく地域の交流するための窓口だと考えている」という意見もあった。最後の「その他」と回答した中には、「移民の受け入れを多くしたらいい」、「小中学校に外国人ルーツの生徒の保護者を授業に呼び、小さい時から外国ルーツの人と社会を作っていることを認識させるきっかけがあれば、交流ができるのではないかな」という意見があった。

これらの意見から、日本人が外国人とさらに交流を深めるためには、交流の機会や環境の提供が重要であることがわかった。また、その機会や環境が安心感や身近さを伴っていることが求められていることも窺える。自分から外国人のコミ

コミュニティに飛び込むことには抵抗がある人が多く、友達や既存の繋がりを介することで、交流へのハードルが下がることがアンケート結果からわかった。

5. アンケートの調査結果のまとめ

本調査のアンケートの回答は、全体的に好意的なものが多かった。日々の外国人との交流の頻度は違うが、多くの人はさらに交流を持ちたいと思っていることが明らかになった。日本人が外国人とさらに交流を深めるためには、交流の機会や環境の提供が重要であるようである。また、その機会や環境が安心感や身近さを伴っていることが求められていることも窺えた。自分から外国人のコミュニティに入り込むことには抵抗がある人が多く、友達や既存の繋がりを介することで、交流へのハードルが下がることがアンケート結果からわかった。この結果を踏まえ、日本人にさらに交流の場を提供することで、外国人と日本人との間のさらなる交流が望めるのではないかと考えられる。

6. ディスカッション内容と意見

2023年12月2日に山梨県甲府市で行われた第11回言語文化教育研究学会研究集会での発表後、次の3つをディスカッションの話題とした。1)日本語授業を担当されている方は、授業でどのように留学生と日本人の交流をしているか。2)交流している場合、どのように日本人を集めているか。3)学校にとどまらず、交流の場を持つためにいいアイデアがあれば、教えて欲しい。ディスカッションには、日本語教育機関で教えている教員もいれば、日本語教育に関係ない分野の参加者もあり、様々な視点から意見交換が行われた。

1つ目のトピック、留学生と日本人との交流と言われた時に、学部の中で学び日本語にほとんど不自由なく話す留学生をイメージする人もいれば、日本語を学び始めてまだ数ヶ月で、どうにか日本語で会話ができるという日本語レベルの留学生をイメージする人もいた。ディスカッションの中で、日本語学習者の日本語習熟度により、可能な活動、想定し得るコミュニケーションに違いがあるということで、実際に学内の学生に教室に来てもらい会話をする、オンライン授業ではZoom上で日本人と会話をする、実際に町に出て町の人と会話をする、町のイベントに参加する、交流を目的としたプロジェクトをさせているため、自然に

交流をしている等、日本語習熟度別の様々なアイデアが挙げられた。交流の内容については、先に述べた使用日本語に限りのある留学生と日本人との交流では、教師が質問シートを事前に用意しそれに沿って会話を進める等ある程度の教師のコントロール下での交流が想定されているようであったが、日常会話に支障のないレベルの日本語を運用できる留学生と日本人の交流では、あるタスクを与えそれを遂行する等、日本語をツールとして共同で行う活動を主に行っているようである。

2 つ目の日本人の集め方については、学校機関の事務に情報を流してもらう、自身のあるいは同僚の教員が担当する日本人学生に参加してもらう、参加予定者に友人等を誘って来てもらう、交流に参加すれば単位がでるシステムにする、教員の知り合いで国際交流に興味がある人に声をかけるなど、さまざまな方法が挙げられた。しかしながら、学生が単位をもらえる等日本人学生に実益があるものはすぐ人が集まるが、純粋なボランティアで参加を促してもなかなか集めるのは困難であるとの声もあった。また、たとえ学生が参加リストにエントリーしていても、ボランティアでの参加であると実際には現れないということも起こるようである。日本人学生の参加へのハードルを下げる手段として、外国人との交流に興味がある日本人に留学生の話し相手を依頼する際などに、日本人学生が留学生の母語に堪能である必要はない、留学生は日本語を勉強しているため、やさしい日本語で会話してもらえればいいと授業の趣旨を説明し日本人学生の不安を取り除くという方法も紹介された。

3 つ目の交流の場を持つためのアイデアに関しては、中級以上の日本語能力を持つ外国人と日本人との交流では、その場限りの交流会ではなく長期的なタスクを設け、共通のタスクの遂行を通して良好な人間関係を築くといった交流のみならず人間関係構築のアイデアが出された。日常会話の運用に制限のある日本語初級の外国人との交流では、チューター制度で交流の場を設けた後も定期的に会う機会を設ける、交流の場で話す場合に話題を外国人と日本人の双方が興味を持てるものにするようにし、その後も趣味や興味の対象に関する情報のやり取りがしやすいようにする等、日本人と外国人の間に立つ者の工夫が求められるアイデアが出ていた。

7. 今後の展望

本アンケートの調査結果やディスカッション内容からも明らかになったように、外国人と交流したいと考えている日本人は多く存在しているが、その機会が与えられない限り自ら動いて外国人との接触を図る日本人は少数派のようである。一方、日本語教育の現場で日本語学習者と日本人の交流の場を設けようとしても、日本人を確保するのに苦労している現状がある。日本人、外国人双方が交流を望んでいるのであれば、日本語教育に携わる教員や事務職員等に交流したい人たちと繋がるルートが確保されれば、交流の機会は徐々に広がっていくのではないだろうか。国際交流に興味がある人や在留外国人と話したい人と日本語教育機関やそこで学ぶ学習者達が日頃から繋がり、パイプを持つためにどのようなことができるかを探ることが今後大切なのではないかと考える。

8. 今後の課題

今回のアンケート調査により、日本人が外国人との交流に関してどのように考えているかを知る貴重なデータを得ることができた。しかしながら回答者は68名であり、その多くが日頃在留外国人と接触する機会が比較的多い人である。今後は日常的に外国人と関わることの少ない人のデータも増やし、これから更に増えると予想される在留外国人との交流について寧ろ関心がない、知識がないといった人たちの意見も考察する必要があると考える。

さらに、先に述べた日本人、外国人双方が安心感や身近さを伴う交流の場を、交流を望む、又は、これまでその機会がなかった人に提供できるルートの構築の方法についても様々な視点からの模索が必要である。そのためには、日本人側からの交流に関する現状、今後の交流機会に期待する意見だけではなく、外国人側からの意見も合わせて見ていく必要があるだろう。

参考文献

梶原雄（2020）「日本人学生は外国人留学生をどう見ているか—同志社大学の日本人学生からの視点—」『同志社大学 日本語・日本文化研究』第17号 93-111.

出入国在留管理庁（2024）「令和 5 年末現在における在留外国人数について」

https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00040.html (2024.12.19)

高屋敷真人（2020）「中級日本語教材作成のための接触場面アンケート調査

(3)」『関西外国語大学留学生別科日本語教育論集』第 30 号 47-57.

姫田小夏（2022）『「友達ができず孤独で不安」外国人留学生が日本社会に溶け込みづらいワケ』[DIAMOND online] <https://diamond.jp/articles/-/300568>

(k-tajima@kansaigaidai.ac.jp)

(shinkohattori@gmail.com)